

# 私の博物誌

題字 石川進

## 第十回 「歌の風景」 (前)

作曲家で随筆家でもあった團伊玖磨先生を心底敬愛した。既に鬼籍に入られ、五月十七日には十三回忌を迎えた。

根強いファンの多い「パイプのけむり」は、名随筆として千八百四十二回に亘り連載され、一九六四年六月五日号「ハンドバッグ」を初回とし、二〇〇〇年十月十三日号「さようなら」が最終回となつて、週刊アサヒグラフは廃刊の運びとなつた。

「パイプのけむり」は、一年半分ずつを編み、単行本として二十七巻まで刊行されるのだが、先生が書かれた本は五十冊をはるかに超えるだろう。東京オリピックが開催された年に始まる「パイプのけむり」は三十六年と数カ月書き継がれるなか、一九九七年九月三日、先生は心筋梗塞で倒れられた。

しかし、九死に一生を得て再起される。同年九月十九日号から十月十七日号までの五回、一カ月の休載で復帰されたのだ。その精神力の強靱さには瞠目を禁じ得ない。

彼の祖父琢磨は、三井財閥の大番頭、父伊能は東京大学で西洋美術史を講ずるなど、名家の出自にもかかわらず、父の反対を押して作曲への道に入る。伊能は知人の山田耕筈に、前もって息子の入門を断つて下さい、との申し入れに對し、その思惑を裏切る形で伊玖磨の入門を許したのだ。一九三九年、伊玖磨弱冠十六歳の時だった。

彼は当初美術を志したというが、生来、紅緑色弱で小学校の図画の時間、教師に屈辱的な言葉を浴びせられ、美術を断念する。

その反動も背中を押して作曲への志望は、極めて強靱なものがあつたのだと思う。山田耕筈は伊玖磨の眼の色に、覚悟の深さを見てとつたに違いない。これこそ邂逅といふべき出会いであろう。

彼の戦中戦後の辛酸は苛烈なもので、当時の日本人は一部のものを除き、真面目な

人々は全て苦しきにあえいでいた時代だ。そんな中、一九四七年四月、彼の隣家に住み、NHKに勤務する若い女性の依頼で作曲をひきうける。やがて婦人の時間のテーマ曲として世に流れるのは、江間章子の詞に附けた名曲「花の街」だった。

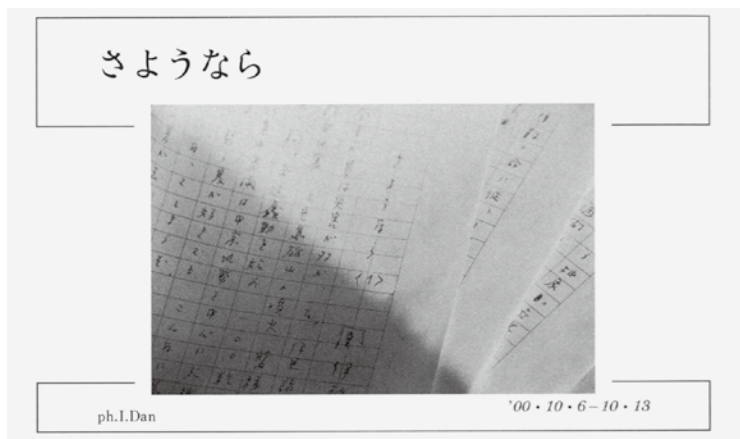
交響曲、行進曲、歌曲をはじめ、子供達にも愛唱される「ぞうさん」「やぎさんゆうびん」「おつかいありさん」など沢山の作品がある。先生の魅力の一つは何にでも興味を持つこと。知らないことは徹底して調べることなど、習慣というより習性に近い好奇心と向学心、探究心に頭が下がるのだ。

敗戦後、生活もままならない頃のこと、何が「花の街」だ、ふざけるなど誹謗されるのだが、このことが詩人の心だと彼は説く。そのような経緯を辿りながら、今も名曲として世に歌い継がれ、私自信も折に触れてこの歌を口ずさむ。

彼の一意専心は一筋ではなく、動植物、歴史、文学、考古、旅行、探検など幅広く教養の窓を開き、深い観察と豊かなユーモア精神の横溢した人だったのだ。心の底にはいつも温かな余裕があり、惜しい人を喪ったと「パイプのけむり」を読むたび私は思う。




単行本化された「パイプのけむり」は、初巻から27巻まで刊行された



アサヒグラフの廃刊で、最後の連載となった2000年10月13日号

書いている人



石川 進

いしかわ・すすむ

一九四二年、いわき市平生生まれ。石川紋店代表。家業のかたわら、幼少から書に親しむ。書の世界で培った点・線・面と墨・紙・水の生理を追求し、石刻による印とのコラボによる抽象、具象の絵画表現を展開。書道史学会会員、書法探求顧問



Super ViO 30

土木建設機械・販売・リース

株式会社 **協和機工**

KYOWA

代表取締役 大淵 利男

〒971-8143 福島県いわき市鹿島町下蔵持字戸の内70の1  
☎(0246)29-4100(代) FAX(0246)29-4200



今日も安全運転

●短期免許取得  
●運転免許ローン有  
●託児所完備  
●卒業生に傷害保険付

公認 **湯本自動車学校**

いわき市常磐水野谷町千代鶴1の2 ☎43-7781




より厳かに より荘重に……

宗教・宗派をとわず  
どのような葬儀も  
お任せください。

**本多斎苑**

〒971-8111 福島県いわき市小名浜大原六反田町7-5  
TEL(0246)92-1500 FAX(0246)92-1505



●大ホール200名収容 ●小ホール80名収容

